第1回 地域精神科医療ワークショップ 開催報告

～多機関・多職種でつながり、クライエントのリカバリーとウェルビーイングを支えるために～

2026年4月24日（金）、第1回地域精神科医療ワークショップを開催しました。
院外からは12機関 22名、院内からは職員3名にご参加いただき、計25名での開催となりました。

参加者数 25名

- 院外：12機関 22名
- 院内：職員3名

1 目的

- 多機関・多職種が関わる精神科臨床において、支援者間の視点の違いを前提とし、それらを統合しながら臨床判断を共有できる関係性を構築する。
- そのプロセスを通じて、クライエントのリカバリーとウェルビーイングを支える「医療福祉共同体」の形成を目指す。

→何が起きているかを理解し繋がるための共通言語を持ち、互いにどこまでやるかというバウンダリーが分かり、自分の限界を知りながら、互いに主体性と責任性を持ってクライエントに関わり、連携・協働する医療福祉専門職共同体。

2 背景・課題

- 地域精神科医療においては「顔の見える関係」の重要性が長年言われているが、実際には形式的な関係に留まりやすく、支援観や臨床判断まで踏み込んだ対話の機会は少ない。
- また、医療・訪問看護・就労支援など各機関は、異なる生活空間・異なる自己の側面を見ているため、クライエント理解や支援方針にズレが生じやすい、このズレが整理されないまま連携が行われると、支援の分断やバランスの崩れが起きている。
- 一方で、この「視点の違い」こそが多職種連携の本質であり、それを統合すること自体が治療的意義を持つと考えられる。

3 本ワークショップの位置づけ

本ワークショップは、単なる知識共有や情報交換の場ではなく、

- 共通言語（概念・枠組み）を共有し
- 多様な視点を持ち寄り
- 臨床判断を共同で構築する

ことを目的とした実践的な学習・対話の場である。

当日の内容

話題提供

橋本（心理士）から

- パーソナリティ症を理解するうえで重要なスプリッティングという防衛機制について
- 対象恒常性の重要性とその意味について

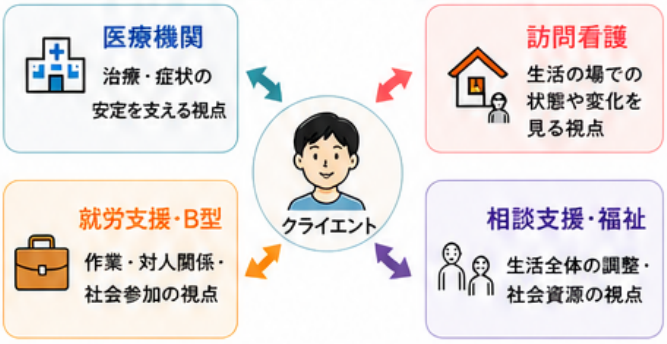
中村（PSW）から

- 生活空間と自己のあり方
- 多職種連携が治療的に機能することについて
- バウンダリー・わきまえについて

グループトーク

話題提供を踏まえて抱いた感想の共有など

多機関・多職種が見る視点の違い（例）



異なる視点を持ち寄り、統合していくこと自体が治療的に機能します。

参加者の声（アンケートより抜粋）

- 同じ人でも場面によって見えている姿が違うという視点が整理でき、とても勉強になりました。
- 見立ての違い＝誤りではないという前提が、連携の土台になると感じました。
- 多職種連携そのものが治療的に機能するという視点に納得しました。
- それぞれの立場で出来ること・難しいことを具体的に話し合えて有意義でした。
- 対象恒常性や、支援者としてのバウンダリーの捉え直しができました。
- 本人の同意がないケースでどこまで関われるのか、実務上の判断の難しさを共有できました。

アンケートから見えた課題（抜粋）

- 誰がどこまで担うのかという役割・責任境界の判断
- 本人の同意が得られない場合の連携の在り方
- 見えている違いをどう支援方針に統合するか
- 連携を「理念」で終わらせず、実務として機能させる方法

まとめ

多機関・多職種連携は、単なる情報共有では成立しません。「見えているものの違い」を持ち寄り、統合し、役割と責任を調整するプロセスそのものが、クライエントの生活統合モデルになります。本ワークショップは、その実践に向けた第一歩として開催されました。

今後に向けて

医療福祉共同体の構築に向けてテーマや頻度などを検討中です。内容が決まり次第、ご案内させていただきます。

文責：医療法人ディープインテンション　統括副院長　中村亮太